

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00131

研究課題名(和文) 謡伝書用語の体系的研究 演奏の理念と表現を中心に

研究課題名(英文) A Systematic Study of Noh Chant Tradition Terminology: Focusing on the Philosophy and Expression of Performance

研究代表者

高橋 葉子 (Takahashi, Yoko)

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：20766448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では室町末期から近世の音曲伝書の翻刻・解読作業を進め、主に次のような成果を得た。 蘭曲思想(優れた芸力に基づく規範に捉われない表現を最高位とする思想)と呂律論(声の高さや太さ等の声調論)の研究により、蘭曲と亡臆(人間的な愁い)の表現がツヨ吟の発生を促した可能性を提起した。 蘭曲と曲舞の研究により、能の技法開拓における謡文化の主導的役割を明らかにした。 『永正元年観世道見在判伝書』『塵芥抄』等の資料研究において、伝書の成立についての新たな知見を発表した。 以上の研究発表に併行して、ウェブ上での翻刻データ公開を行い、音曲用語のデータ収集と解説作業を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音曲伝書は、従来系統調査が進められてきたものの、音楽的内容についてはほとんど踏み込まれず、伝書の概要が紹介されるにとどまっていた。これは本来音楽の言語化が困難である上に、音楽そのものの歴史的な変化と音楽的価値観の変化があるためである。本研究での精査により、いくつかの音曲伝書については従來說を改訂することができた。また、見逃されていた有用な音曲伝書を発掘し、広範な活用を期してWEB上で翻刻紹介した。研究を通じて歴史的音楽用語の註解と音楽記事索引作成を準備した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we reprinted and interpreted Ongyoku Densyo (a book of secrets of Noh music) from the late Muromachi and early modern periods, and mainly obtained the following results.

Through my study of the Ran-gyoku thought and the theory of Ryo-Ritu, I have raised the possibility that the expression of Ran-gyoku and Bou-oku(grief) may have prompted the occurrence of tsuyogin. Through my research on the Ran-gyoku and Kusemai, I have clarified the leading role of chant culture in the development of Noh techniques. In research on several sources, I presented new findings on the formation of the biography. In conjunction with the publication of the above research papers, I have made the reprinted data available on the web. In addition, I have been able to collect data on the terminology used in the music and provide explanatory notes.

研究分野：能楽の音楽的研究

キーワード：謡伝書 謡文化 蘭曲 呂律 ツヨ吟 クセ 観世道見 五音

1. 研究開始当初の背景

能の音楽は、音階の圧縮と拍節の伸縮という世界的にも稀な特徴を備えており、その仕組みに対する学術的関心が近年グローバル化している。但し、上記のような特殊性の基盤には、音程や拍子の規範的な正しさに価値をおかず、規範からの逸脱に表現の核心をおく演奏理念や美的価値観があり、それゆえ能の音楽を正確に把握するには、音階やリズムなどの外的構造だけでなく内的構造である演奏理念や美的価値観を学術的に体系づける必要があるのだが、それらに対する研究は殆ど進んでいない。一方、音曲伝書は演奏の理念や価値観を伝える有力資料にもかかわらず、音楽研究においては敬遠されがちであり、能楽研究全体の中でも未開拓分野である。その原因の一つは、歴史的な音楽用語と言語表現の難解さである。そのため現状では、著名な音曲伝書に対しても、音楽的には疑問のある解釈が散見する。こうした研究の実情に対して、音楽学の立場からの伝書記事の精密な読解が必要であると考えた。またその成果は、伝統芸術諸分野との学際的研究にも資するであろうと考えた。

2. 研究の目的

前項に述べた能音楽における「規範からの逸脱」の最も顕著な結果が、ツヨ吟と三地謡という歌唱法である。この二つの歌唱法の形成過程の解明は、本研究の最終的な目的の第一である。研究期間における目的は音曲伝書記事の学術的活用の促進であり、具体的には次の2点である。資料研究と有用な音曲伝書の発掘・紹介、翻刻データや音曲伝書項目・用語などの検索しやすいシステムの準備。

3. 研究の方法

室町末期の音曲伝書は合抄と改編による複雑な構成を備えるため、研究の前提として系統調査が必要である。そのため研究方法として、以下の3点を設定した。選抜した音曲伝書の条目のナンバリングとこれをもとにした記事の整理と他伝書との比較。代表的な音曲伝書の翻刻データ化。演奏理念と表現に関する用語・言語表現の抽出と解説作成。発声、息、フシなど技法に関する用語・言語表現の抽出と解説作成。

データ入力には、必要に応じて協力者を依頼する。ウェブページでの公開には、日本伝統音楽研究センターの情報管理員に作業を依頼する。

4. 研究成果

以下の諸研究を行い成果発表を行った。

(1) 蘭曲思想の研究

世阿弥の音曲伝書『五音』『五音曲条々』を中心とした謡伝書の読解と例曲分析を行い、従来は能の外縁的存在と捉えられている座敷謡が、舞台能の音楽的発展に主導的役割を担ったことを提起した。また『五音』に挙げられる蘭曲の例曲の多くが後にツヨ吟になる事等から、祝言の表現がツヨ吟発生を促したとする定説に対し、蘭曲の思想がツヨ吟発生に結びついた可能性を指摘した。以上を「蘭曲が能にもたらしたもの」として能楽学会大会(2022)で報告し、同題の論文を『能と狂言』第20号(能楽学会、ペリかん社、2022)に発表した。

蘭曲の代表的な曲種である節曲舞について作詞・作曲・即興の観点から分析し、現在行われているふしやリズム型のいくつかが蘭曲から生まれた可能性を諸資料から明らかにし、蘭曲の音楽的創造性を提起した。成果として論文「節曲舞の作詞・作曲・即興の実際 想像の場としての「乱曲」へ」を『日本文学研究ジャーナル』第28号(古典ライブラリー、2023)に発表した。

囃子にとっての蘭曲である「一調」の研究として、報告者は江戸期の金春流太鼓伝書と福王系謡伝書等を調査し、現在は太鼓を用いない曲である定家 芭蕉の太鼓一調を紹介し、その創作と伝承の過程を考察した。成果として、論考「定家 芭蕉の太鼓秘説 金春流太鼓橋本市左衛門の伝書より」を『武蔵野大学能楽資料センター紀要』に発表した(2023)。

(2) 謡伝書「永正元年観世道見在判伝書」の研究

室町末期成立の金春系謡伝書「永正元年観世道見在判伝書」は、声の調子としての呂・律と謡表現との関係について、世阿弥の呂律論(呂を祝言の声とする)とは逆の主張を展開する伝書である。報告者は、東洋音楽学会大会での口頭発表「「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論」において本書の呂律論を分析し、呂の声による亡臆表現とツヨ吟の共通性を指摘した(2022)。また論文「「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論 呂の声を中心に」として『日本伝統音楽研究』第20号(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究紀要)に発表した(2023)。

「永正元年観世道見在判伝書」の伝存する二本(法政大学・東北大学)の全文翻刻、および異本である『謡曲拾穂鈔』との校異を作成し、検索と閲覧の便のため、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音アーカイブズに発表した(2023)。(但し同サイトはサーバトラブルのため現在公開を中断している)

同伝書に合抄される「音曲十五之大事」は、室町末期の謡の技法、他伝書に見られない曲目や詞章、現在行われない未詳の謡習慣など、様々な新情報を提供する点で資料価値が高い。この伝書は従来、似た外見を持つ「十五之次第」の再編伝書と見做されてきたが、両書の内容は異なり、先後関係も従来説とは逆と考えられる。本書の資料価値と成立事情について、「観世道見仮託「音曲十五之大事」の資料性 観世宗節筆「十五之次第」との比較を中心に」の論題で能楽学会大会（2024）において発表した。論文は次年度に発表予定である。

（3）謡伝書『塵芥抄』の研究

『塵芥抄』は室町末期の謡の構成音を記す重要文献であるが、従来は音階資料として扱われるのみで、伝書の全容については殆ど研究されていない。報告者は、神戸女子大学古典芸能研究センター謡伝書研究会（代表者樹下文隆）において同書の全文翻刻を共同で行ったのち（2022）、同書の典拠の一つである『混沌懐中抄』との関係を調査した。両書の関係については、これまで『塵芥抄』が『混沌懐中抄』の増補本であるかのような誤認も一部に生じていたが、報告者は『混沌懐中抄』への依拠度が低いことを明らかにした。成果は「『塵芥抄』と『混沌懐中抄』の条文比較」として『神戸女子大古典芸能研究センター紀要』（2023）に発表した。

（4）囃子伝書の研究

宮増小鼓伝書は、室町末期囃子伝書の代表的存在であり、室町文化の中での能の音楽表現の理念と実態を物語る重要資料だが、従来内容の研究が殆ど行われなかった。報告者は法政大学能楽研究所拠点研究の一として、重田みち氏（代表者）、宮本圭造氏らと共に宮増小鼓伝書の網羅的調査を行い、その成果として11種の宮増伝書（内8種担当）の翻刻校訂を『宮増小鼓伝書の資料と研究 - 室町文化横断研究のために』（重田みち編、法政大学能楽研究所、2021）に発表した。

上記宮増伝書群の代表的な三種について、伝書の合抄と改編の実態を分析し、芸道書形成の道程を提示した。さらに、宮増弥左衛門親賢の代に、兄の弥七時代の奔放な芸から中道的な芸への転換があったとする定説に対し、定型を越えた積極的な表現によってこそ芸は磨かれるものだという、芸道の基本理念が変わらずに継承されていることを指摘した。以上は論文「室町末期小鼓伝書の改編と継承 鴻山文庫蔵の三種の宮増系伝書を中心に」としての出版物に発表した。

「京観世五軒家」の一として現代まで続いた浅野太左衛門家の資料研究（研究代表大谷節子）を行い、流儀不明の小鼓伝書が、現在は廃絶した葛野流小鼓のものであることを明らかにし、『謡の家の軌跡』（大谷節子編著）で資料解題を行った（2022）。

本研究では以上の資料研究に併行して、いくつかの音曲伝書の翻刻解題と用語解説作成を進めた。次年度よりの科研費研究24K03461 基盤研究（C）「音曲伝書の体系的研究」に継続し、編集・アウトプットを進める。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高橋葉子	4. 巻 20
2. 論文標題 「永正元年観世道見在判伝書」の音曲論 「呂の声」を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』	6. 最初と最後の頁 108-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋葉子	4. 巻 28
2. 論文標題 節曲舞の作詞・作曲・即興の実際 創造の場としての「乱曲」へ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 78-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋葉子	4. 巻 17
2. 論文標題 『塵芥抄』と『混沌懐中抄』の条目比較	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 樹下文隆・大山範子・長田あかね・藤田隆則・高橋葉子	4. 巻 16
2. 論文標題 『塵芥抄』を読む 「早稲田大学演劇博物館本と京都観世会浅野文庫本（弥石源太夫識語本）翻刻」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 88-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋葉子	4. 巻 34
2. 論文標題 定家 芭蕉 の太鼓秘説 金春流太鼓橋本家市左衛門の伝書より	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 武蔵野大学能楽資料センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋葉子
2. 発表標題 永正元年観世道見在判伝書の音曲論
3. 学会等名 東洋音楽学会第73回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋葉子
2. 発表標題 関曲が能にもたらしたもの
3. 学会等名 能楽学会第20回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋葉子
2. 発表標題 浅野文庫の離子伝書
3. 学会等名 能楽学会第33回能楽フォーラム
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋葉子
2. 発表標題 観世道見仮託「音曲十五之大事」の資料性－観世宗節筆「十五之次第」との比較を中心に
3. 学会等名 能楽学会第21回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 能楽学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ペリかん社	5. 総ページ数 140
3. 書名 能と狂言 20	

1. 著者名 大谷節子・家原彰子・高橋葉子・中尾薫・中嶋謙昌・真島望・宮崎修多・米田真理	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 375
3. 書名 謡の家の軌跡 浅野太左衛門家基礎資料集成	

1. 著者名 藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江・坂東愛子・永原順子・長田あかね他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5. 総ページ数 195
3. 書名 能 羽衣 を解剖する 音曲面を中心に	

1. 著者名 高橋葉子・重田みち・宮本圭造	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法政大学能楽研究所	5. 総ページ数 242
3. 書名 宮増小鼓伝書の資料と研究 - 室町文化横断研究のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>2021年出版物 http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/uncategorized/2019/3602/</p> <p>2023年インターネット公開 「謡伝書の具体的理解と体系的把握に向けて 「永正元年観世道見在判伝書」の翻刻データ公開」 https://rcjtm.kcua.ac.jp/archives/kanzedomizaihandensyo.html 但し上記webサイト（伝音アーカイブズ）は現在修復中のため公開を一時停止している。修復後はURLが変更される可能性がある。</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------